

教育長 様

校番 037 庄原格致 高等学校長
(全日制 課程)**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る
研究指定校（STEAM型教育牽引校） 令和7年度実施報告書**

1 学校の教育目標等

(1) 教育目標

本校は「格物致知」（得た知識を実社会で応用すること）を実践し、高い知性と豊かな感性を持ち、進んで地域や社会に貢献できる生徒を育成することを教育目標としている。

本校の母体である私立格致学院の設立の理念である「格物致知」に基づき、本校の実施する様々なカリキュラムの中で、物事を深く理解したり探究したりすることにより、真理に至るのであり、この営みが社会に必要な知識・技能及び思考力等と、人間として必要な豊かな感性を身に付けさせることにつながる。

さらに、自らの責任を自覚し、知ったことや学んだことを自分が属する社会の発展に生かすことを目標としている。

また、これらの目標達成のために、マスタールーブリックの共有、総合的な探究の時間（以下、「総合」とする）に係る取組と各学年における成果、公開研究授業における成果と課題等について、複数回の教員全体研修を行っている。また毎年、各分掌において教育の全体計画の見直しを行い、それらを校務運営会議において共有し次年度の教育目標及び学校経営計画を設定している。

(2) 育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力

ア 課題発見・解決能力、思考力、実践力

イ 知識、メタ認知能力

ウ レジリエンス

育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力を教員全体で計画し、それに基づいたカリキュラム・マネジメントを行うために、昨年度から本校のグランドデザインについての教員研修を行っている。この研修において、教育目標の達成のための年間計画について、各学年の教員が総合を軸にして学校行事や分掌、学年の取組を振り返り、全学年で成果と課題を共有することによって3年間を見通した改善案について協議した。また、目指す資質・能力を育成するための具体的な取組については、総務部、教務部、探究活動推進委員会が連携して計画し、校務運営会議、教科主任会議、職員会議において周知している。

(3) 学科等の特色

本校は普通科3クラスのうち1クラスは医療・教職コース（以下、「コース」とする）となっている。令和元年度にコースが設置され、将来医療職・教職を希望することだけでなく、今後とも必要とされる医療・教職から課題を見付け、探究していくことを特色として、広島国際大学、県立広島大学、広島大学等から講師を招聘するなどして学ぶ機会を設定している。本コースの特色づくりのための実験的な取組として発足し、同好会に発展させた「フィランソロピー同好会」は本コースの生徒が主となって企画・実施する小学生STEAM教室を活動の主軸としている。令和8年2月時点で81回を迎え、地元の小学生の心と体の成長に資する教育内容を回数を重ねるごとに深化させている。

総合は、3年間の流れがストーリーになっており、学習活動を立案する担当者（探究活動推進委員会のメンバー）はそのストーリーを意識しながらも昨年度の反省や今年度の研究テーマ、各学年の生徒のこれまでの取

組や学年の目標と照らし合わせながら年間を通して計画を微調整しながら実施している。このようにカリキュラム・マネジメントを絶えず行っていることが最大の特色である。1学年は「メタ認知」を主要テーマに掲げ、自分とことん見つめ自己理解を深めることを目標に1年間の活動を組んでいる。2学年では、前期にはグループ探究を、後期には個人探究を行っている。グループ探究では、様々な視点から課題を見付け、それを誰かの役に立つための探究活動につなげている。その中で市役所、商工会議所、県雇用労働局等の外部のサポートを充実させ、協働の価値を生徒が実感できる仕組みを実践している。連携先を教育的パートナーとして協議・連携を重ねてきた実績が連携先と学校との信頼関係を育み、地域で子供を育てていこうという共通理解のもと教育活動を実践できる土壌がある。2学年の後半から3学年では、これまでの学びの深化とその集大成として個人探究を行い、その成果として論文にまとめていく。2学年のグループ探究も3学年の個人探究もチューター一制による指導を行っており、探究活動を通じた生徒の変容を目の当たりにした教員の探究指導に対する意識の変容がここ数年の大きな変化と言える。

2 研究結果の概要 ※「令和7年度研究計画書」を参照して記入してください。

(1) STEAM型カリキュラムの改善内容（仮説、検証方法及び検証結果）

ア 研究仮説

個人探究に向けて2学年のグループ探究、STEAM型を意識したカリキュラムとして確立することによって、次の効果が得られるだろう。

- ① 社会貢献の探究課題において、課題設定や解決策を提案する際に、各生徒の得意分野を切り口に情報収集させることで、多角的・多面的な視点を得ることができるだろう。
- ② グループ探究における議論等において、収集した情報を根拠やデータに基づいて整理・分析したり、根拠やデータに基づいて自分の意見を表現したりすることで、実践力が向上するだろう。
- ③ 教員間で最低限の指導内容や方法、到達目標及び評価指標を共有することによって、教員の本校のSTEAM型教育に対する理解が深まるとともに、指導力が向上するだろう。

イ 検証方法

生徒質問紙調査における「総合的な探究の時間の学習を通して、将来の夢や目標が明確になってきたと思います。」の項目の回答の経年変化を見る。また、生徒のワークシートの記述を分析し、個々の生徒の変容、探究の深まりを見る。

ウ 検証結果

- ・ 研究仮説①について、12月に実施した生徒アンケート『総合的な探究の時間』で考えたことを、自分らしさや将来の生き方につなげようとしている」の2年生の肯定的回答（「あてはまる」「ややあてはまる」の合計）が82.6%（年度当初84.3%）であった。目標値85%に届かなかったものの同アンケートで「あてはまる」と回答した2年生は年度当初13.2%から12月に31.3%に増加したことから、自身の得意分野を意識して探究活動に取り組んだことで、それらを自身の将来と関連付けるなど多角的・多面的な視点を得た生徒が一定数いるものと考ええる。
- ・ 研究仮説②について、同じく12月に実施した生徒アンケート「自分で課題を設定し、データを活用して現実世界の問題解決に繋げるような探究活動を行っている」の2年生の肯定的回答が75.1%（年度当初53.9%）と増加した。このことから、探究活動をより深いものにするため、探究を始める際に、文献や先行研究、社会調査等の客観的なデータを基に課題を設定するように指導した結果、それに基づいて探究活動を進めるなど、探究の成果をより説得力のあるものにしようとしている生徒が増加していると考ええる。
- ・ 研究仮説③について、教員アンケート「教科横断的な学びを実践している」の肯定的回答は81.8%であり、目標の90%を下回った。各教科の授業において他教科と関連する部分が多いが、その関連性を授業内で取り上げたり、総合における探究内容と教科の関連性を意識させたりすることについて、教員間の意識にばらつきがみられた。STEAM型教育への教員の協力体制はあるものの、目標や評価指標を明確に示すことができておらず、認識に差が出たためと考える。

エ 令和6年度までに開発したSTEAM型カリキュラムの改善内容

- ・ 第2学年の総合において、探究のステップを明確に示した。これにより、生徒と教員双方が各段階で共通の目標に向かって探究を進めることができるようになった。また、個々の探究が目指すところは異なるが、そ

れらを大きく3つのパターン（①小学生STEAM教室型、②制作物型、③実験観察型）に分類することで、探究のゴールイメージを具体的にした。

- ・ 生徒同士の協議の場を多く設定し、生徒が自分の探究について発表するだけでなく、発表内容についてグループで協議してその後の探究活動の改善につなげるようにした。
- ・ 生徒の活動状況に対して、チューターの教員ができるだけ毎時間コメントするよう取り組み、生徒個々の探究の軌道修正と進捗管理を行った。
- ・ 医療・教職コースの2年生と1年生が、探究において小学生STEAM教室を企画するなど、医療・教職コースの特色を活かしたカリキュラム作りを行った。

(2) 生徒の変容

- ・ 生徒質問紙調査「(59)ある事象がなぜ起こるのか、仮説を立てて検証しようとしています。」の2年生の肯定的回答51.7%（令和6年度2年生46.0%、同1年生41.3%）、同調査「(64)学んだことを日常生活にどう活用できるか考えます。」の2年生の肯定的回答59.4%（令和6年度2年生43.1%、同1年生48.9%）、と増加している。このことから、身の回りの課題や出来事を仮説を立てて検証したり、学んだことを関連付けて課題の解決に活用しようとしたりする生徒が増え、探究のステップが定着しつつあると考えられる。
- ・ 生徒質問紙調査「(6)自分のよさは、周りの人から認められていると思います。」の2年生の肯定的回答91.2%（令和6年度2年生78.5%、同1年生88.1%）、同調査「(69)総合的な探究の時間の学習を通して、もっと深く学びたいという意欲の高まりを感じています。」の2年生の肯定的回答60.0%（令和6年度2年生56.9%、同1年生54.0%）であり、どちらも増加している。このことから、生徒が自身の興味関心の高い得意分野を意識して探究活動に臨んだことで、探究の課題を自身の課題として意欲的に取り組もうとしていることが分かる。実際に、デジタル機器に興味のある生徒が、3DプリンターやiPadを利用して「3Dプリンターでネームプレートを作ろう」という小学生STEAM教室を企画したり、VRゴーグルなど他のデジタル機器を活用した探究に取り組んだりして自身の得意分野を探究活動に活かしている。

3 学校実態調査結果（報告書作成時点のもの）

調査名	項目	結果
生徒質問紙調査	II (62)「総合的な探究の時間の学習を通して、将来の夢や目標が明確になってきたと思います。」において、「よく当てはまる」と回答した生徒の割合	25.1 %
	II (64)「総合的な探究の時間の学習が、各教科での学びに役立っています。」において、「よく当てはまる」と回答した生徒の割合	11.1 %
	II (73)「自分は学校が育成を目指す資質・能力を身に付けていると思います。」において、「よく当てはまる」と回答した生徒の割合	12.0 %
学校質問紙調査	I (7)「各教科において、課題を発見し、解決する過程を通じた「主体的な学び」を全教員が実践している。」において、「ほとんどの教員が当てはまる（8割以上の教員が実践している）」と回答した教員の割合	100%
	I (8)「総合的な探究の時間において、課題を発見し、解決する過程を通じた「主体的な学び」を全教員が実践している。」において、「ほとんどの教員が当てはまる（8割以上の教員が実践している）」と回答した教員の割合	100%
	III (24)「生徒が「各教科ならではの物事を捉える視点や考え方（各教科における「見方・考え方」）」を組み合わせさせて働かせ、課題解決に取り組み、その中で得られた学びを教科・科目の学習に生かすことができるように、組織的に計画・実施している。」において、「1と2」又は「1と2と3」と回答した教員の割合 1 学年会議や総合的な探究の時間の担当者会議等で、生徒が複数の教科の「見方・考え方」を組み合わせさせて働かせることができるように、学習内容を計画し、実施している。	0%

	<p>2 学年会議や総合的な探究の時間の担当者会議等で、総合的な探究の時間の学びを各教科・科目の学習に生かすことができるように、意見交換・情報共有等を行っている。</p> <p>3 学年会議や総合的な探究の時間の担当者会議等で、生徒が複数の教科で学習した「知識や内容」を活用できるように、各教科の学習内容を共有している。</p> <p>4 学年会議や総合的な探究の時間の担当者会議等で、生徒が複数の教科の「見方・考え方」を組み合わせさせて働かせたり、学習した「知識や内容」を活用したりできるような取組を行っていない。</p>	
生徒実態調査	学校外での探究活動（発表会等も含む）に参加した生徒数	41人
	学校内外での探究活動の成果を自身の進路選択に活用した生徒数（例）学校推薦型選抜、総合型選抜を受験した生徒数 等	29人
学校独自アンケート等	自分は「格物致知」を学校生活の中で実践している。 「あてはまる」「やや当てはまる」と回答した生徒の割合	63.4%
	「総合的な探究の時間」で考えたことを、自分らしさや将来の生き方につなげようとしている。 「あてはまる」「やや当てはまる」と回答した生徒の割合	88.2%
	自分で課題を設定し、データを活用して現実世界の問題解決に繋げるような探究活動を行っている。 「あてはまる」「やや当てはまる」と回答した生徒の割合	63.8%

4 令和7年度の研究成果及び課題 ※2年間の事業の経過を踏まえて記入してください。

<p>(1) 成果</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒質問紙調査「総合的な探究の時間の学習を通して、将来の夢や目標が明確になってきたと思います。」において「よく当てはまる」と回答した生徒の割合は25.4%であり、これは令和6年度14.1%から大きく増加した。このことから、研究仮説①にもあるように、生徒が自身の得意分野を意識して探究を進めたことで、自分が興味をもっている分野や得意分野が将来の夢や目標に繋がっていると感じた生徒が増加したと考える。実際に、本年度の3学年で総合型選抜または学校推薦型選抜等を受験した生徒の内、ほぼ全ての生徒が何らかの形で自身の探究活動の成果を受験に活用しており、全学年において、探究活動を自身の将来と関連付けて考える指導が定着しつつある。 本校のSTEAM型教育モデルは探究活動において「生徒や教員が教科の枠に限らない得意分野の知識やスキルを融合させる」というものである。個人探究及びグループ探究において、探究を進めていく過程で、生徒同士の協議の場面を多く設定した。実際に、小学生STEAM教室で体を動かすことをテーマにした授業を計画する際には、「そもそも運動が嫌いな児童はどうするのか」「自分は音楽が好きだから音楽の要素を入れたらどうか」など様々な意見と個々の生徒の得意分野を融合させて、より多くの児童が楽しめる企画を完成させた。このように、個人探究、グループ探究に関わらず、探究活動において生徒が周囲の生徒や教員と積極的に関わり、異なるアイデアやスキルを融合したり、時には自身の考えを改めたりしていく中で、探究を深めようとするのが、本校の探究におけるSTEAM型教育モデルである。本年度は、このSTEAM型教育モデルを2学年総合のカリキュラムに落とし込むことができた。 <p>(2) 課題</p> <ul style="list-style-type: none"> 探究活動において、専門的な内容について支援を得るための外部との連携が十分にできていなかった。教員が個別の判断で外部連携を行っているのが現状であり、外部連携に対する校内体制が未整備である。 総合の各単元において、目標と評価指標について、個々の生徒、教員で認識にズレがあり、生徒の自己評価と教員の評価にズレが生じている。

5 令和8年度の目標及び取組内容

(1) 令和8年度の目標	
本年度作成した総合のカリキュラムを継続して実施し、校内に定着させるとともに、各単元の目標と評価指標を明確にすること、外部連携を推進することによりカリキュラムを充実させる。	
ア アウトプット（活動指標）	
① 総合の各単元における目標と評価指標を生徒と教員の双方に明示し、生徒の自己評価と教員の評価が一致するようにする。	
② 探究活動において、大学、企業、他の高等学校、市役所等との外部連携の校内体制を作る。	
イ アウトカム（成果目標）	
① 1、2年生の総合において、探究活動の生徒の振り返り評価と教員の評価が共にA段階（「十分満足できる」）となる生徒の割合が30%以上である。	
② 1、2年生の総合において、探究活動のいずれかの段階において、学校外の人と連携した生徒の割合が30%以上である。	
(2) 令和8年度のカリキュラム改善の内容	
総合の各単元における目標と評価指標及び、それについての説明や評価時期を明確にしてカリキュラムに落とし込むことにより、本校の総合のカリキュラムに対する生徒・教員双方の理解を深め、内容を充実させる。	

6 令和7年度会計報告（見込みを含む）

対象	費目	金額（円）	積算基礎（円）
連絡協議会	旅費（出張旅費）	7,140	1 出張旅費 1人×2回（安古市高校、戸手高校） =7,140円
研究の推進	報償費（講師謝金など）	33,600	1 外部講師謝金 1人×（2h×2回、3h×1回） ×4,800円=33,600円 （広島大学 吉田成章 准教授）
	旅費（講師旅費など）	15,280	1 外部講師旅費 1人×3回×5,280円=15,840円 （広島大学 吉田成章 准教授 大学会館前駅～備後三日市駅）
	需・他（研究に必要な物品購入費など）	199,900	1 3Dプリンター 84,700円 2 iPad（ケース等含む） 68,600円 3 モニター 46,600円
研修等での実践報告	旅費（STEAM型カリキュラム推進研修旅費）	19,615	2人×2回（広島県立総合体育館 計15,055円） 1人×1回（安古市高校 4,560円）